

一二五〇年振り再現

宇佐八幡神 東大寺へ参拝

大野 保 治

まえがき

奈良・東大寺で一昨年（平成十四年）十月五日に開かれた「宇佐八幡神輿（みこし）フェスタ（祭）」。宇佐神宮本神輿の大仏殿参拝を約一二五〇年ぶりに再現し、秋の古都を練り歩いた。地元の宇佐市、そして奈良市の人たちにも、多くの感動を残した。

観光客が注目

宇佐市からフェスタに参加したのは、神輿の担ぎ手や同市内の児童ら、それに関係者たちであった。

当日の午後零時半、総勢約五百人の行列が東大寺参道入り口をスタート。参道から南大門をくぐり、大仏殿前広場まで練り歩いた。にぎやかに響くテンポの速い道行きばやしや、例年の祭りにも増して勢いよく練り歩く神輿。土曜日という

こともあり、多くの観光客の注目を集めた。大仏殿前広場でも多くの観衆が終了まで足を止め、フェスタを見物した。

フェスタは巨大な大仏殿の前に、宇佐米などの奉納や子どもたちの芸能披露などが、緊張感の中で進められた。そして北馬城文化財愛護少年団の楽打（がくうち）が演じられているさなか、大仏殿の大仏の顔の部分の高さにある小さな扉ヒラが音を立てて開いた。

この扉は重要な祭礼行事の時だけ開けられる。直前まで、宇佐から東大寺に開けてくれるように要望し、断られていた。もっとも、外が明るく中が暗い関係で扉が開いたからといって、外から大仏の姿が見られるわけではない。しかし「子どもたちをはじめとした参加者の一生懸命な姿を、大仏にもよく見てもらおう」。当日になって東大寺側が、最大限に感動の意志を示した結果だった。

神が門くぐる

天平勝宝元年（七四九）、禰宜（ねぎ）尼の大神杜女（おのがもりめ）をはじめとした八幡神の一行が東大寺に出向き、大仏殿を拝した。転害会てんがいえはその故事をしのび、大仏殿の西側にある転害門で、十月五日に毎年行われている祭礼行事

である。

例年は地元の人だけだが、今年は宇佐から神輿の担ぎ手約百人が加わった。約一二五〇年前に宇佐の八幡神がくぐった転害門。門の下に据える神輿は、例年はごく小さなものだが、今年は宇佐の担ぎ手が本物を据えた。東大寺の高僧、手向山八幡宮の神職者に宇佐神宮の神職者が加わり、滞りなく手順を進めた。

大仏殿東側にある「手向山八幡宮」には、フェスタの終了直後に参拝した。同八幡宮は、宇佐から八幡神一行が東大寺を訪れた際、東大寺の守護神としてできた宇佐神宮最初の分社であり、担ぎ手が本殿の中に神輿を据えて祈りをささげた。

終始和やかに

奈良市は今年、東大寺大仏開眼から一二五〇年の節目。それを盛り上げてくれたということで、宇佐からの大勢の参加者を温かく歓迎した。同市の大川市長は「この催しで宇佐に対する奈良市民の関心も非常に高くなったと思う。せっかくのチャンス。文化など互いの発展につながるように今後交流を深めたい」との考えを示した。

奈良市と宇佐市には、ともに韓国の古都、慶州市と交流し

ているという共通点がある。奈良市は一九七〇年から姉妹都市、宇佐市は九二年から友好親善都市の関係を結んでいる。奈良市はことし六月、福岡県太宰府市とも友好都市関係を結び、歴史や文化の交流をさらに進めている。

宇佐市は、和氣清麻呂の出身地の岡山県和氣町と八九年から姉妹都市を結んでいる。「和氣清麻呂」は七六九（神護景雲三）年の「道鏡事件」で、道鏡の野望をくじく神託を宇佐神宮から奈良の都に持ち帰った人物である。そして今年、道鏡の出身地である大阪府八尾市とも「歴史的和解」に向けて始動。八月の宇佐神宮夏越祭で八尾市が、九月の河内音頭祭り（八尾市）で宇佐市が、互いに特産品などを出して物産交流もスタートした。

夢がかなった

今年の催しは、宇佐神宮の夏越祭で若宮神輿を担いでいる「若宮神輿かつごう会」が中心になって企画した。一九八九年に若宮神輿を復活させて以来、描いていた構想だった。計画を進める中で、王子神社（大分市）の担ぎ手をはじめ、県外からも「神輿を担ぎたい」と多数の申し出があった。

同フェスタの実行委員長（井本代表）は「全国の神輿好き

が、物心両面で協力してくれた。大仏殿の前まで神輿を届け、迎講を受けている時に、皆の夢がようやくかなったと思った」と、市内外の人たちが一体となった取り組みの成果を強調する。

感動を活力につなげていくことが、今後求められる。「催しを計画していく中で、若手が育った。これからも、地域のことを地域の若手が考えていくきっかけができたと思う。神輿を通じて、市内各地域の輪がさらに広がるのでは」と、井本代表は期待している。

(平成十四年十月三十日「大分合同新聞」要約)

大仏開眼前夜

県立歴史博物館(提供)

『続日本紀』(六九七―七九二年全四〇巻)によれば、天平勝宝元年(七四九)十二月二七日、八幡神は大仏を礼拝するために上京した。この時、聖武太上天皇(註①)は大仏が完成したことに對し感謝の宣命(②)を捧げている。これは、大仏造立の進捗が思わしくなかったとき、八幡神が協力するとの神託を下したことに對するものであった。このように聖武が大仏造立成就を祈願した八幡神とは一体どのような神で

あったのであろうか。

『八幡宇佐宮御託宣集』によると、八幡神は欽明天皇三三年(五七一)に宇佐御許山にあらわれ、その後宇佐地方の神として大神氏と辛島氏によって祀られていた、という。この時期、渡来系の辛島氏が祀っていたことを踏まえれば、大陸や半島の影響を受けた神であったとも見られている。

ところが養老四年(七二〇)、朝廷による隼人(③)出兵の折に守護神となって以来、律令政權と深く関わる神となっていくのである。この時の状況を『託宣集』では、豊前国司宇奴首男人(④)、神官大神の朝臣諸男(⑤)、禰宜(⑥)辛島波豆米、僧法連などが協力して勝利をおさめたとしている。また、この時より隼人の霊を弔うため、放生会(⑦)が行われることとなった。

さらに、八幡神がその神威を發揮するのは、天平一二年(七四〇)太宰少貳「藤原広嗣の乱」(⑧)の鎮圧である。広嗣は藤原四兄弟の一人宇合の子息であり、この乱は政界に大きな衝撃を与えた。広嗣軍には隼人が参加していたため、対隼人の守護神である八幡神に戦勝祈願がなされた。結果は、この戦いも朝廷軍の勝利するところとなった。

こうした奈良時代の八幡神にとって、聖武天皇の存在は

大きな意味を持った。聖武は、守護神として八幡神を敬い、藤原広嗣の乱鎮庄の報賽（お礼参り）として八幡神に秘錦の冠（⑨）、最勝王経などを奉献した。一方で、聖武は仏法の加護によって理想国家をつくりあげることを目指し、諸国に国分寺（⑩）・国分尼寺（⑪）を建立した。その総仕上げともいべき事業が東大寺大仏造立なのであった。聖武はこの事業の成就を八幡神に祈願し、ここに八幡神は「鎮護国家」の神として位置付けられたのである。

（平成13年秋「八幡神信仰と遺宝展」資料より）

【註記—編集部（大野）】

註① 太上（だいじょう又はだじょう）天皇

天皇讓位後の称号。六九七年持統天皇が称したのに始まる。

② 宣命（せんみょう）

天皇の命令を国語で書いた文書

③ 隼人（はやと）

ハヤヒトの略。古代の九州南部に住み、風俗・風習を異にして、しばしば大和の政権に反抗した部族。のちに服属し、一部は宮門の守護や歌舞の演奏に当たった（その

長が隼人の司）。「隼人舞」は古代日本の舞踊の一つで大隅・薩摩地方の隼人が行なった風俗歌舞で大嘗会などで演じた。その祖先ホデリの命（火照命）が海水に溺れ苦しんださまを演じたものであるという。

④ 首（おびと）

オオヒト（大人）の略で首長の意。古代の姓（かばね）の一つで、地方の県（あがた）主、稲置（いなぎ）や伴の造（とものみやつこ）に多いとされる。

⑤ 朝臣（あそみ又はあそん）

アソ（吾口）オミ（臣）の略。姓の一つで八色（やぐさ）の姓の第二位。主として皇別の氏に与えられ平安時代以降は、皇子と皇孫に与えられた。のちに三位以上の人の姓の下で四位以下の人につける尊称となった。

⑥ 禰宜（ねぎ）

神主の下位で、祝（ほふり）の上に位する神職という。ネギは「祈（ね）ぐ」の連用形からつけられた。

⑦ 放生会（ほうじょうえ）

仏教の不殺生の思想に基づいて、捕獲された生類（しようるい）を山野や池沼、川や海に放つ儀式という。神社・仏寺で陰暦の八月十五日に行なわれた。

⑧ 藤原広嗣(ひろつぐ)

広嗣は奈良時代の廷臣。太宰少貳(「しょうに」は帥(そち)・大貳(だいに)の次の官で「じょう」とも呼ばれる)藤原宇合(うまかい)の子。藤原不比等(ふびと)の四子が没した後、重用されていた吉備真備(きびのまきび)や僧玄昉(げんぼう)を除き、藤原氏一族の勢力を挽回しようとして太宰府で挙兵したが敗れ、肥後の地で斬刑にされた。

⑨ 秘錦(ひごん)の冠(かんむり)

秘錦は秘金錦(ひきんごん)の略で、金糸を織りつけた錦(にしき)で金襴(きんらん)で飾られた冠

⑩⑪ 国分寺(こくぶんじ)・国分尼寺(くににじ)

七四一年(天平十三) 聖武天皇の勅願により五穀豊穡・国家鎮落のため、国分尼寺とともに国ごとに建立された寺。正式には四天王護国之寺といい、奈良東寺を総国分寺とした。

参考資料として京都大学文学部国史研究会編『日本史経典』

(東京創元社昭和二十九年初版) など。



(写真提供「大分合同新聞社」)